

はじめに

「瀬戸内における水環境を基調とする海文化」は、瀬戸内の海への親しみや関心を高め、人々とのふれあいや絆を深めるツールとして、各地に伝わる海文化の情報を収集・整理し、瀬戸内海の沿岸域の市民へ提供してきた。これまで、市民に最も親しみのある「食文化」をはじめとして「伝統行事」「石の文化・塩の文化」「藻場・干潟と保全の取り組み」「海・浜辺と保全の取り組み」を順次提供してきたが、今回はその最終回として市民の身近にある海文化として「日々の生活に根ざした身近な景観と保全の取り組み」についての情報を収集・整理した。

瀬戸内は、温和な気候風土、穏やかな海のため、古くから人の営みが行われ、その時代の遺跡や文化財が各地に数多く残されている。瀬戸内の文化は「瀬戸内海には、海の文化、石の文化、塩の文化、・・・など、自然環境と一体となった環境文化が根付いてきたと言われており、原生林の様な大自然は無いが、自然と調和した里海の漁村、里地の農村、里山の山村などの営みが中心となってきた。現在も、瀬戸内海は自然と歴史と文化が渾然となった重層的で多様な風景をもっている。(瀬戸内海辞典、南々社、137-149頁、西田正憲より)」と総括されている。

その生活の場である島々や沿岸域の里には、伝統の風景である農・工・商の風景、町並み等暮らしの風景があり、また斬新な風景として近年のコンビナート夜景やマリナー等がある。さらに、それらが自然景観と組み合わせ合わせて融合した景観資産地区やそれらを繋ぐランドスケープ・ネットワーク（景観遍路回廊）も瀬戸内の貴重な景観資産である。

平成 27 年の瀬戸内海環境保全特別措置法の改正及び瀬戸内海環境保全基本計画の変更において、それまでの2つの目標「水質の保全」、「自然景観の保全」は、『豊かな海』の実現に向けて「沿岸域の環境の保全及び創出」、「水質の保全及び管理」、「自然景観及び文化的景観の保全」、「水産資源の持続的な利用の確保」という4つの目標に追加変更された。景観に関しては「自然景観」に加え「文化的景観」の保全が掲げられたことが特筆される。

今回、瀬戸内の景観情報に関して「日々の生活に根ざした身近な景観」としてその歴史と特徴を整理し、その景観の価値を紹介することとした。このことにより、これらの貴重な景観と人々との絆が深まり、継承への寄与につながれば幸いである。

2019年に、米国で最も著名な媒体の一つ、「The New York Times (ニューヨーク・タイムズ)」の電子版で、「52 Places to Go in 2019 (2019年に行くべき52か所)」が発表され、日本で唯一「瀬戸内の島々」がリスト入りし、7番目に紹介された。

瀬戸内海の多様な風景や文化は、国内のみならず海外の人々をも魅了しているのである。



せとしるべ 高松港玉藻防波堤灯台
提供：(公社)香川県観光協会